

## 1. 会議名称

杉並の教育を考える懇談会（第7回）

## 2. 日時

平成12年9月19日（火） 午後6時30分～8時30分

## 3. 場所

区役所中棟6階 第4会議室

## 4. 出席者

委員

生重、石川、大束、小林、高瀬、長谷川、林、平林、松丸、森田

薩日内委員は都合により欠席

幹事

松本教育委員会事務局次長、佐藤庶務課長、和田学務課長、工藤指導室長、荒井社会教育スポーツ課長、秋葉施設課長

事務局

辻教育委員会事務局参事（特命事項担当）、田中副参事（特命事項担当）、飯田庶務課庶務係主査

## 5. 会議次第

（1）開会

（2）前回会議録の確認

（3）本日の懇談テーマ

学校で子どもたちが「生きるよろこびいっぱい」になるには

（4）今後の日程について

（5）閉会

## 6. 会議録

**会長** 第7回の懇談会を始めさせていただきます。

9月8日、会長としてこの間各委員にご審議いただいた中間のまとめを教育長にご報告申し上げ、書類をお渡しいたしました。これからあとは教育長の判断で、教育委員会等で審議の材料になるかと思えます。

次に、前回の会議録の確認をしたいと思います。事務局よろしくお願いします。

**副参事** 事務局から事務連絡です。前回の会議録の確認ですが、9月28日（金）を目途に訂正等がありましたら事務局に御連絡ください。

本日各委員の席には参考として、教育報と、区で行った区政モニターアンケートを配布していますので、今後の議論の材料にさせていただきたいと思います。それではよろしくをお願いします。

会長 会議録はそれぞれの委員が確認をいただきたいと思います。

本日の懇談のテーマは、前に各委員にお渡したように、各委員のご意見と私の意見を集約した格好で、いろいろなテーマをやってきましたが、その残りをしたいと思います。

まず2番目の「学校制度の人間化」で、学校並びに学校全体を開放化するという「学校と家庭、地域社会のリンケージの強化」というテーマです。それから、次の大きい括りである3番目の「学校施設の人間化」です。学校の校舎などの木造化等4項目が書いてあります。それから4番目の大きな括りとして、子どもを育てるという立場から、「育児・保育・教育の連合化」という、もう少しお互いに連絡をとってやるようにしたらどうかというテーマです。その次が「子どもたちにとって優しい杉並区づくり」という、私はチャイルド・エコロジーという考え方でこれを取り上げたいと思いますが、このようなテーマを今日話し合いをして、10月からのテーマに続けていきたいと思います。このそれぞれは切り離して考えるべきものではなく、お互いに関係があり、またお互いに影響し合うようなテーマだと思いますので、今日これ全体を各委員と話し合いをしていきたいと思います。

私は、「学校と家庭、地域社会の連携を強くする」というのは、いじめや不登校をなくす学校づくりというものと直接関係があると思いますし、家庭教育、社会教育、学校教育のインタラクションを深めるのに有効だと思います。子どもたちが学校に来なければ、それは家にいるか、それ以外の場所にいるわけですから、そういった問題を家庭と学校と地域社会をもう少し、お互いに繋がる関係にする必要があるのではないかと思います。それは取りも直さず教育という立場から見れば、家庭教育、社会教育、学校教育がお互いに影響し合う、お互いに持ちつ持たれつ良くしていくことができるようなシステムをつくる必要があるのではないかと考えるわけです。

「学校施設の人間化」は、校舎などの木造化という問題があるのではないかと。私は、長崎県の五島列島の育児の調査に、子育て等を専門にしているハーバード大学の小児科の先生にお供をして行ったときに、その小学校の校舎を見ましたら、まさに杉並区の小学校とほとんど同じなのです。地域の特性というものがない。彼は非常に驚いたのです。それは、1つは日本の教育というものが、いかに全国にちゃんと浸透しているかということにはなるわけですが、何か、五島列島の地域を反映したような校舎であっても

いい。それは、取りも直さず杉並区もそれなりに、いろいろな学校の作り方があっていいのではないかということです。もちろん学校の外から見た学校全体もそうですが、学校の中も、昔のようなクラスルームで細かく分けてあるような学校ではなく、子どもたちが、自分が勉強したいテーマによっては大きなクラスに行けるような学校です。杉並区にもいくつかそういう新しい学校が出来ていると思いますし、私がいま週に何回か行っている多摩市では、新しい中学校は、私たちが子どもの時にあったようなクラスルームではない、新しい作り方ができていますし、同志社大学の中学校、小学校では、子どもたちが寝転んでも授業を受けられるような雰囲気のある校舎になっているというような話も聞いていますので、そういうことを考えたらどうだろうか。

学校と公園をドッキングさせたらどうだろうかとか、学校と老人ホームや保育園をつなげてしまったらどうだろうかという考え方もあります。公園と学校をドッキングしたらいいのではないかというのは、10年以上も前の臨時教育審議会でもディスカッションが出ていまして、その時に話題になったのは確か台東区の小学校だと思いますが、それを地域の人たちに開放して、夕方になるとそのプールを使って泳ぐとかというようなバリアフリーというのでしょうか、障害者も入るし地域の人も入ってくるという、非常に広い意味での、学校の施設を人間的な立場からもう少し敷居を低くするというか、みんなで使えるようなものにしたらいいのではないか。これは考えてみると、子どもたちの数が減ってきて空き教室ができたときに、そういうものをもう少し、杉並区のいろいろな地域の活動に有効に使えるような体制を考えたらいいのではないかということに、通じるのではないかと思います。

校庭の農園化、これは委員の1人が言われたのをここに私が書いたわけですが、全ての校庭をそうするわけにはいかないかもしれませんが、広い校庭を持っている学校ならば農園をつくるとか、もう少し広げるといっても、私はそれなりに意味があるのではないかと思います。

大きな4は、子どもを育てるという立場から、育児・保育・教育をもう少しつなげたらどうかということです。これは教育・育児・保育も「育」、「育てる」がついていまずから、みんな「子どもを育てる」というのが本来の目的ではないかと思います。もちろん学校は、先生が生徒に教えながら子どもを育てていくという立場だと思います。ですから「教育」ということになるわけです。しかし、子どもに教えるばかりが学校ではなく、子どもが自分で学んでいくという「学育」という言葉もあるのではないかと思います。考え方も重要ではないかと思います。

育児は家庭で親が、あるいは血のつながった人が子どもを育てるという立場だと思えますし、保育は子育ての専門家である保育士、ないしはそれに準ずる人たちが、子どもを社会的な立場から施設で育てるということになると思うのです。しかし、育児・保育・教育と、それぞれがいままではあまりにも分かれ過ぎている。もう少しそれを連携したほうがいい。特に小さい乳幼児の子育てになると、親の子育て能力が、もう少しはっきり言えば家庭の育児能力と言ったらいいと思いますが、そういうものが弱くなっている現在の社会で、学校なり保育園なりがもう少し親の子育てを支援するような体制をつくる必要があるのではないかと思います。

いま夫婦で働いている親たちにとって困るのは、保育園までは夕方まで見てもらえるけれども、学校に行くようになると学校が終ると帰されてしまう。そういった学童の保育をどうするかという問題が出てくるわけです。児童館なりが引き受けて、そういう子どもたちの世話をするということも考えなければいけないのではないかと。実はこういうことを言っても、実際に、杉並区でどういうふうになっているかということのデータがありませんので、できればそういうデータもお話しただければ有難いと思っています。

大きな5番は、子どもの生きる力とか、育つ力とか、あるいは学ぶ力というものは、いまから10年前、30年前、50年前、おそらく100年前をとってもそんなに変わっているわけではないと思う。それなのに昔はあまり問題にならなかったいじめがどうして出てくるのだろうかとか、あるいは学校に行かないような子どもたちが出てくるのはどういうわけだろうかというのは、子どもたちの「生活の場」の問題だろうと思うのです。そういう考え方をするのは、いわゆる生態学(エコロジー)でして、そういった子どもたちの生活の場にあるいろいろなものが、子どもたちの心の、私流に言えばプログラムに生き甲斐を与えていないのではないかと。例えば杉並区はどちらかといえば善福寺公園をはじめ、それなりに緑の多い所だろうと思いますが、緑がたくさんあるということも子どもたちの心のプログラムを動かすのに、非常に重要ではないかと考えるわけです。ところが今は、遊びの場がなくなっている。私たちが子どもの時には空地があって、それが原っぱになっていて、原っぱとして子どもたちが遊ぶことができたと思うのです。現在の社会では空地というものは非常に少なく、原っぱがなくなっているわけですから、ある意味でいうと、私たちは人工的な原っぱをつくらなければいけないかもしれない。

ロンドンに行きますと「ハムステット・ヒース」という言葉がありますが、これは大きな空地で、いわゆる原っぱなのですが、そこは人工的な物は何も入れない、自然そのものを手をつけずに残しているような所を言うそうです。私が3年間いたときに、私

の子どもも小さかったものですから、ヒースとかそういうものは、公園とは違った子どもたちの遊びになっているということを学びました。イギリス人はダーウィン以来の生物学的考え方の非常に強い国ですから、そういうものを、手を入れないで残そうという考え方があったと思うのです。

日本、特に杉並区も、私が桃井第四小学校に通っているころは、ヒースに負けないような林がありましたが、いま行ってみると善福寺川の両脇は全くの宅地です。そういう原っぱ、遊びの場がなくなっている。とすれば、何かそういうコンセプトで子どもたちの新しい原っぱをつくるという工夫もあっていいのではないかと思います。

5の3は、子守歌とか、童謡が流れるような街にしたらどうだろうかというのが私の考え方です。私も直接関係している「子どもの虐待」という問題があります。親が我が子を虐待する。子どもをかわいいと思えない。そして叩いたりする。昔は児童相談所ぐらいでそういう問題は処理されていたのですが、70年代以降、この30年間に子どもの虐待という問題が小児医療の現場で見えるようになったわけです。

これは、実はアメリカのほうがもっと歴史が古くて、私は1954年にアメリカでインターンをしていた時に、もう既に救急室に子どもがいて、親が「子どもがベッドから落ちた」と言うので、私もそうかと思って見てみると、打った所の手足が動かないということで、確かにベッドから落ちたとそこで判断されました。そうしたら私の上にいるアメリカ人のドクターが、「おまえ、全身のレントゲン写真を撮れ」と指示するわけです。全身の写真を撮ると、ベッドから落ちて打ったという所以外の骨も折れている、というような事態があったわけです。実際はベッドから落ちたのではなくて、親が子どもを投げたりして怪我をさせているわけです。

それは現在のアメリカの社会が、人間関係が希薄であるということが関係しているのではないかと思います。日本にそういうものが増えてきたとすれば、やはり街全体がなんとなくそういう優しさというか、人間関係を大切にするような、電車の中では子どもたちがお年寄りに席を譲るとか、あるいはお腹の大きいお母さんに譲るとかという気持ちになれるようにするためには、街に童謡が流れたり、子守歌がどこかでチラッと聞けるような雰囲気がなければいけないのではないかという趣旨で、これを書いたわけです。

5の4は、子どもの教育というものは、単に家庭だけの問題ではないし、学校だけの問題でもないし、子どもたちに声をかけるような運動があってもいいのではないか。例えば子どもたちに「おはよう」というようなことから始まって、「元気？」ということもあるでしょうし、あるいは悪いことをしていればそれを見た街の人たちが注意をする

とか、優しく諭すということになるのだろうと思いますが、そういうことをしてもいいのではないかと。私は昭和14、15年ぐらいに電車で府立の中学校に通っていたわけですが、その時に、駅でおばあちゃんに注意をされたことをいまでも思い出します。いまは注意なんかしたら家庭のほうから文句が出てくるかもしれませんが、そういうことが杉並区では少なくとも常識的に行われるような場になったらいいのではないかと思います。子どもに注意をすることは、子どもは単に家庭だけの存在ではなくて、社会の中で子どもが育っていくために、みんなが優しく子どもたちに声をかけて、場合によっては注意をするという運動ができたらと思うのです。これもなかなか難しいとは思いますが。

昔ならば、お互いがそういうふうに人間関係を保ちながら生きていかなければ生きていけない社会であったかもしれませんが、現代の社会というのは、いまはドライな人間関係でもなんとなく生きていけるから、こうなってしまったのだという見方も私は出ると思います。

しかし、20世紀は物の時代であったと多くの方が言います。それは科学技術の進歩のおかげです。私が子どもの時に西荻窪の駅の辺りでうどんを食べると、その中に小さなトリ肉が1個か2個ぐらい転がっているのがトリを食べるということでしたが、いまはブロイラーチキンの技術で、いまの子どもたちがトリを食べると言ったら足1本食べることになると思うのです。そういう時代になってしまったのです。しかし21世紀はおそらく心の時代だろう。文化を大切にするとか、歴史を大切にするとか、そういうような時代がくるのではないかと多くの人は言うております。これはヨーロッパでも言っています。ですから、そういうことを考えたら21世紀、心の時代に向けて杉並区も全体として何か新しい行動を起せばいいのではないかと思います。

子どもの生活の場としての杉並区の感性情報を豊かにする。この感性情報という言葉は難しいのです。皆様方は世の中のいろいろなことから常識的に、情報という考え方はご理解いただけると思います。情報には理性の情報と感性の情報と、2つに分けることができる。例えばお母さんが我が子に「あなたはいい子ね」と言って話し掛けている時に、「あなたがいい子である」ということは知性の情報なのです。しかし、母親が我が子に「あなたはいい子ね」と話すときには、必ずそこには独特のリズムやピッチや、抑揚があるわけです。そういうのは感性の情報です。知性の情報と感性の情報が組み合わさって社会には情報が流れていると考えるわけです。子守歌だとか、童謡だとか、あるいは子どもたちの歓声というものは、感性の情報によって評価されるのではないかと。いう意味で、こういう言葉も入れましたが、それはエコロジーの考え方で、子どもたちの

生まれながらにして持っている力をフル回転させるものは何かと云ったら、家庭、あるいは学校、あるいは地域社会にある情報であるという考え方から見れば、感性の情報も非常に重要なのではないかという意味で、こういう言葉を出したわけです。

ここにある学校制度の人間化にしろ、学校施設の人間化にしろ、子どもを育てるといふ問題にしろ、子どもに優しいまちづくりをするということにしろ、お互いに深く関係しているものですので、全部まとめて自分の考えをここで言わせていただきました。これから後は、自由にこのテーマについていろいろなご意見を言っていただけたらと思います。そして第8回以降の懇談テーマとして、家庭教育のあり方、社会教育のあり方、地域の教育力のあり方をどういうふうにするかということを考えながら、いまお話ししたようなことを忌憚のない意見を聞かせていただければと思います、どうぞよろしくお願い致します。

**委員** 前回は話題になっていたことなのですが、いじめ・不登校をなくす学校づくりというところで、発言の機会を逸しましたので、是非今回最初に述べさせていただきたいと思います。

いじめ・不登校をなくす学校づくりというのは、現在いじめに悩んでいる子ども、不登校で学校に行かれない子どもにとって深刻な問題だと思うのです。私自身はあまり楽観的には考えることができません。いじめをなくすと言っても、いじめはなくなるわけがないと思っているものですから、一言述べたいと思います。

もちろん、いじめはなくさなければいけないので、子どもたちにいじめをしてはいけないと理性に訴えかける教育を否定するわけではなくて、そういうものも必要だと思うのです。しかし、人間の本質というか、人間というものを考えたときに、私も子どものころは成長して大人になるといじめはなくなるのかと思っていたのですが、実際に大人の社会に足を踏み込んでみたら、これは子ども時代どころではない、ドロドロとした生きにくい世の中だったわけです。おそらくどなたも多かれ少なかれ、そういう息苦しさみたいなものを人生の中で感じられているのではないかと思います。

ですから、子どもたちだけにいじめをなくそうという理想的なことだけ教えるのではなくて、そうしたいのだけれども、思わずいじめてしまうこの人間というのは、一体何なのかというような、人間そのものを深く考えるような機会を、もっと教育の中で取り上げてほしいと思います。言い方を変えると、人間の弱さというものを理解するような教育があってもいいのではないかと思います。

例えば、いじめの標的になるというものもいろいろパターンがあると思いますが、例

えば自分より弱い者をついいじめてしまうという場合もありますし、非常に優れた人、出る杭は打たれるという、非常に優秀な人に対して頭をポカポカ引っ込むようにさせるというような、いずれにしてもマイノリティーの存在者に対して、つい攻撃をしてしまうというのは、学校だけではなくどんな人間集団にも見られる1つの傾向だと思っております。

ですから、いじめをただ子どもたちのいじめだけの問題という、特殊なことと考えるのではなく、古今東西と言いますか、これはやはり人間には付いて回るものだということを理解した上で、実際に次の段階としては、ではそういう不幸な出来事が学校の中で、教室の中で、友達同士の中で起こってしまったときには、どうしたらいいのかということを中心に考えていかなければならないと思っております。

いじめをなくそうと思って、いくら注意をしても、交通事故のように出会ってしまう、そういう不幸なことに遭遇してしまうことが起こり得るのだ、というふうな認識の下で、では実際にもし自分にそういう事柄が降り懸かったときには、どうやってそれをかわしたらいいか。実際に、何も知識がないときに急にそういう目に遭ってしまうと、いままで家族に守られて幸せに生きていた人はあまりにもショックで、それに対処できないということが起こると思うのです。子どものころから、人間社会では、友達集団ではそういうことが起こるかもしれないよという情報として教育をしておいて、実際にそうなった時にはどうしたらいいのかという対処の仕方、かわし方、逃げ方も一緒に具体的に伝えていったらいいのではないかと思います。その対処の仕方に関してはケースバイケースで一概には言えないと思っております。

例えばいま、ある弁護士の方が書いた『だからあなたも生き抜いて』という本がベストセラーになっているようですが、この方などの例でも分かるのですが、いじめられたことによってもう嫌になってしまってグレたのですが、いろいろ支えてくれる人、厳しく叱ってくれる大人の助けを借りて、立ち直っているいろいろ資格を取りまくって、最後には弁護士の資格も取ったという方です。そういういじめ体験を克服した人たちの話というのは大変参考になりますし、実際に苦しんでいる子どもにとっては、とても励まされる話ではないかと思うのです。私個人でも、いろいろ職場のいじめに遭って悩んでいた時に、友人などに聞くと「それでも、あなたをいじめている人は1人でしょう」とか言われて、「私の職場では1人ではすまないわ」なんていう話を聞きますと、「あっ、自分だけではなかったのね、こういう体験をしているのは」というだけでも、ずいぶん気持というのは軽くなるのです。

最初の話に戻りますが、子どもたちにもいじめをなくそうと、少なくとも自分がいじめの側には回るなということをお教えることは大切だと思いますが、もしも、いじめられた時とか、そういうことに巻き込まれた時に、具体的にどうするのかという教育もあっていいのではないかと思います。ただ、いじめてはいけないと言っているだけでは、実際にそういういじめが起こった時の解決には何もならないと思うので、そういうことも必要だろうと思い、意見を述べさせていただきました。

不登校のほうで、これは私の勤務先の学生たちが始めたことなのですが、参考になればと思いご紹介させていただきます。きっかけは1人の学生が東大和市に住んでいるのですが、東大和市の教育委員会が不登校児・生徒の支援活動を始めて、そういうボランティアに参加してくれないかという話を聞きまして、私の勤務先の学生が1人名乗り出たことをきっかけに、4、5人がこのプログラムに参加したのです。

不登校児・生徒、特に引きこもりと言われる子どもたちは、引きこもっている自分を変えたい気持ちがとてもあるのですが、それをうまく表現できなかつたり、行為ができなかつたりで活動に結び付いていけない子が多いのです。こういう子どもたちは全員ではないと思いますが、傾向として、自分の過去を知っている人たちとあまり関わりたくない。つまり親とか教師に、ああだこうだとか言われたくないというのがあるらしくて、新たな第三者、いままでの自分を知らなかった誰かとの新しい人間関係を築く中で、引きこもり状態から社会に一步踏み出す、新しい人間関係を通して立ち直っていくということが、学校に行く1つのきっかけになったりするということが往々にあるそうなのです。

この学生たちは東大和市の教育委員会のプログラムで何をしたかということ、要するに子どもたちと、不定期ではあったようですが、一緒に遊ぶと言ったらなんですが、話し合ったり、一緒に何か活動をしたりとか、遠足に行ったり、長期休業の時にはキャンプに出掛けたりして寝起きを共にするのです。

たまたまうちの大学は一流校ではないところがかえって良かったみたいです。実際に私たちの大学に来る学生というのは、「やっとの思いで大学生になって嬉しいな」という感じの学生が多いわけなのです。特にこのプログラムに参加した学生自身の中にも、過去に不登校だったから大検を受けて大学に入ったとか、いろいろ自分自身も苦しい体験を乗り越えてきた学生が何人かいて、そういう子たちが中心になって参加したので、引きこもっていた子どもたちも親近感を覚えてくれたというか、かつてはそういう体験をしていたのだけれども、いまは大学生になったお兄さん、お姉さんという形で、

非常に心を開いてくれたようなのです。

そうではない方が行っても新たな、これからつくる人間関係の中で立ち直るという効果はあるのではないかと思います。とにかく若い人たちと一緒に活動をする中で、不登校を克服する生徒たちも何人か出てきたということで大変好評です。東大和市という少し遠くなのですが、それ以来本学の学生が毎年そのプログラムに希望者を募って、とりあえずいまは教職課程に在籍する教員志望の学生が参加しているのですが、そういう体験をして実際に教員になっていますので、いまの子どもたちを知るということで学生にとっても非常にプラスになりますし、実際にそういう学生と接して不登校を克服してくれた子どもたちもいるということなので、1つの実践例として、ほかの市の教育委員会がこのようなことをやっているということでご紹介させていただきました。以上です。

会長 どうもありがとうございました。私だって小学校のときにいじめられましたからよく覚えています。ただ、当時いじめられたのといまのいじめは、どうも質が違うのではないかという気がしています。そういうのはやはり社会全体のものの反映である。私たち医者の中だってそういういじめみたいのはあります。けれどもそういうものを予防するというか、軽くするというか、そういうことを考えないと、このまま放置してもよくないのではないかと思うのです。

私自身のそういうことを考える考え方は、子どもは誰でもいじめのプログラムを持っている。けれどもある人はそれを理性で「こういうことはしてはいけない」と抑えて、いじめをやらない子どももいる。しかし、そのコントロールの効かない子もいる。コントロールの効かない子は学校の中の競争だとか、私流に言えば感性の情報の貧弱な生活の場では、そういうものを起こしやすいと考えるから、逆に言えば杉並区は優しい情報のあるような街にしたらどうですかというのが、私のいちばん言いたいことなのです。それでこういうことを並べているのです。ですからこれはそれぞれを全部ぶつ切りにして考えるべき問題ではないと思うのです。確かに子どもはいじめのプログラムを持っているのです。それは誰でもそうだと思う。特に家庭の文化が違うような家の子どもはターゲットになったり、障害があったりするといじめに遭ったりする。これは非常にまずいと思うのです。でも、子どもの育つ家庭だとか、学ぶ教育の場、学校の生活の場が、そういうものをなんとなく大切にするような場になっていけば、あまりひどいことはしないのではないかというのが、私のいちばん言いたいことです。

委員 いじめの問題ですけれども、確かに私も思いますが、それは大人もいじめ大好きですから、たぶん人間がそういうことから解放されるということはないと思うのです。い

ま言われたように、先に「いじめな」と言うよりも、いじめられたらどうするのだという教育といいますか、そういうものを先に私もすべきだと思うのです。つまり「平和憲法があるから戦争にならない」と同じで、攻められたらどうするのだ、侵略されたらどうなのだということなしで生きているのと同じことです。例えば子どもの教育の現場の中でも、まだいじめのようなものが顕著に表われていない段階においても、仮に子どもたちにそういういじめがあったらあなたはどうやってそれを克服するのだとかいうことを、あらかじめ予防と言うのでしょうか、そういうものの準備が日本の教育の現場というか、家の中にないと思うのです。

それは学校におけるいじめの問題だけではなくて、すべてが後手に回って、何か事件が起こった後に「どうするのだ」となる。つまり、ほとんどの事を後知恵でやろうとするのが社会一般を包んでいる考え方だと思いますから、子どもの教育の現場の中で、いじめが起こる前から子どもたちに、いじめられたらどうするのだということを、先に教育の現場でやったほうがいいのではないかと思います。

仮に、クラスにいじめっ子がいたとします。その子に「君がいじめられたらどうするのだ」ということを仮に言ってみる。その言い方はいろいろあると思いますが、そういうものを教室の中でやれるような雰囲気にするべきではないか。

いまのいじめと昔のいじめの違いというのは、私も戦後教育を受けた人間ですが、我々の時代にも当然いじめはあったわけですが、何でいまの時代と我々の時代のいじめの程度の差、違いがあるかといったら、これは先生が怖かったからです。ぶん殴られましたから、学校というか、教室の現場の中で自分よりも絶対強いやつが感じられたわけですから、私も先生に4回も5回もビンタをはられたことがあります。そうしますと、その地域の中に自分より強いやつがいるということが明確に分ければ、これは抑止力になります。そういうものがあつたからこそ、そういうものが多分に押さえ込まれていた。あるいはそういう場所の中で考える力があつたと思います。

いまはそういう抑止力が切れている所であれば、人間が持っている、いじめたり何かするようなものは無制限に切れかかったり、というのはあると思うのです。やはり人間を性悪説というか、そういう形を見て、「いじめてはいけませんよ」とか何かということの中で物事が進むということは、とてもおめでたい考え方だと思いますから、いじめが発生する前から、いじめられたらどうするのだ、侵略されるということを前提に置いてどうするのだということの中で、そういう予防を考える風土をつくっていかないといけないのではないかと考えています。

**委員** いじめということで、小さい時からのいろいろなことを思い出すわけですが、このあいだ、1年生が20分ぐらいの休みにクラスの男の子同士でボールの取り合いをしていたのです。楽しい遊びもできなくて、とうとう喧嘩で終始してチャイムが鳴ってしまったということです。私はその後のフォローというか、やらせたい気もしますし、時間もきてしまったのでどうだったのかなと注目していたのです。ただ、言いたいことは学校の中での遊び、地域の中での遊び、遊びを通して喧嘩も起こる。トラブルも起こる。いろいろなことを学ぶのだろうなと想像するのです。

公立の幼稚園を併設しているのでよく行くわけですが、幼稚園の子どもは実によく遊びます。先生も目配りをしながらいろいろと遊んでくれています。小学校に入りますと、遊ぶのは低学年、中学年です。高学年も遊ばないことはないですが、わりと外に出たくなる。家庭ではどうでしょうか。地域ではどうでしょうか。遊びを通してもっと遊ぶ場とか、関わりとか、人間とか、空間、時間ですね。その辺どうしたらいいか、私は提案をしたいというか、もう少し先生方のご意見も聞きたいと思います。

**委員** 実は私は長い間、民族の研究をしているのですが、子どもの社会も大人の社会もみんな引くくめて、いじめ、喧嘩、競争、規則はなくならないのです。これがない社会というのは面白くないのです。民族の研究をしているということは、これがいかに文化的にスムーズに行くかということ調査・研究をするわけです。

日本の場合は単一民族ではないのですが、単一民族に近いから社会の中の民族的、部族的ないじめがあまりないのです。しかし、例えばいまイスラエルとパレスチナがいじめ合っています。これは1種の喧嘩でもあります。規則をつくらうとしていますが、なかなか出来ません。またアメリカに住まわれた方なら誰でも知っていると思いますが、あの中には主義、思想、宗教、民族、これらの大人の間のいじめというのはすごいですよね。そして子どもの世界にもあります。

私が民族を研究していてどうして青少年教育を始めたかといいますが、戦後の日本の教育の中には、こうしたいじめ、喧嘩、競争、規則というものに対して、それを認識しながらどう生きるかという教育がなかったからなのです。戦後の日本の学校教育だけでは生きる力は育成できない。進学・進級のための教育はできるのですが、60年、80年生きるというための教育はほとんどなされていなかった。私自身もそうです。それに私自身が気付かされて、これでは日本は行き詰るなと感じたのが昭和45年なのです。それでなんとか自分ができることをしなくてはいけないということで昭和46年から始めたのが、「異年齢集団の遊び、体験学習」です。

いま、教育用語として「異年齢集団」という言葉が盛んに使われているのですが、昭和46年に私が異年齢集団という言葉で提唱した時には「なんだ」ということで、すごく怒られました。学校教育学には異年齢集団という言葉はありません。社会教育にはあるのです。普通の一般の生活にもあります。こうした異年齢での遊びだけではなく、いろいろな行動、それがいじめ、喧嘩、競争、規則というものを子どもたちに見させる機会と場なのです。戦後の学校教育では同年齢の輪切りですからいじめ、喧嘩、競争、規則というものが無い形でやっていこうとしています。非常に真綿に包まれた人間関係を理想としていまして、生きる現場の力を育成するための教育ではなかったような気がします。そこで私はいち早く、このままでいくと日本はひ弱な文明社会になるのではないかと思って、野外での体験的学習を提案したわけです。しかも異年齢で。その中で、いちばん良いのが遊びです。これは世界中どこにもあります。遊びのない民族、部族はいないのです。

いま私は、文部省の補助金を貰って世界の遊びの調査をしているのですが、子どもの遊びというのは非常に類似しています。その遊びの世界がすべて大人になるための条件を備えているわけなのです。いじめもあれば喧嘩もあるし、競争もあるし、規則もある。この前の懇談会の時にも言いましたが、遊びにはまず仲間、規則、競争というこの3原則がなかったら遊びではないのです。

もう1つ私たちが言っているのは「遊び」、「野外伝承遊び」という言葉を使っているのですが、野外伝承遊びというのは2人以上が野外で遊ぶことです。しかもその遊びを親が知っていることなのです。それを「野外伝承遊び」と言っているわけです。単なるゲーム的な遊びだと親、祖父母は知らなくてもいいのですが、野外伝承遊びとなると、親、祖父母が知っていることが条件なのです。それはなぜかというと、いじめも、喧嘩も、競争も、規則も親が知っていて、それを子どもに遊びという行動をもって教えていけるわけなのです。遊びそのものを親が知らないと、それはゲームになってしまって、遊ぶということ自体が中心になってしまいます。

今日ここに来る前に、私は3時半から5時過ぎまで渋谷区の教育委員会が開いていた遊びの教室に参加していたのです。幡ヶ谷のスポーツセンターでやっていました。しかも体育館の中でやっていたのです。それで「なぜ遊びを体育館の中でやるのだ」と教育委員会に文句を言ったのです。野外伝承遊びを親と子どもが一緒になってやっていました。体育館はつくられた空間で安全です。しかも雨が降っても、太陽が照っても、寒い日でも全て同じようにできる条件だから、体育館の中でやるといいという形です。しか

し、遊びというのは野外で、厳しい自然の中で、そして人間同士が競い合って、いろいろな不和な状態があって、その中でやり抜くということが大目的です。野外では寒さ、暑さ、湿度、そういう物理的な条件に耐えるということがまず大事なのです。それは生きる防衛体力を養成する。「体育館の中での遊び」ということであるとゲームになってしまい、ゲームを楽しむということになってしまうわけなのです。そこには物理的条件はないのです。防衛能力を強くさせるための物理的条件は整っていないのです。ただ感性の世界で気持ちよく遊ばせたいというだけでは遊びを通じて防衛体力を強くすることはできないのです。

そこで渋谷区の教育委員会に「是非次からは、親子でする野外伝承遊びは外でしてほしい」という話をしたら、よく理解されなかったのです。遊びを単にゲームとして“楽しい遊び”と捉えると体育館の中でもいいのですが、育成という形でいじめ、喧嘩、競争、規則、そして防衛体力を培うための遊びなら、大自然の下でやるほうがいいわけなのです。

日本の学校教育も、社会教育も、家庭教育も教育、育てるということがすべて受験、知識、進級という方向に向かっていっているのではないのでしょうか。日本で現在やられている教育の中で、生きることに通じるという教育、その目的を失ってしまっているのではないかと、非常にひ弱な日本人を育成しているのではないかと、思っています。単に遊ばばいいというのではなくて、遊びというものが一体どういう役目をするのか、それを考えてしなければいけないと思います。

人類すべて遊びをしています。人間は遊びをする動物です。それは実は子どもにとっては単なる遊びなのですが、大人のほうから考えたら教育なのです。そのいちばん大事な生きるための教育を戦後の日本は教育と見なさなかった。ここに大きな問題があるのではないかと思います。もう一度、遊びとは教育の原点であるということを考え直していただいて、皆さんで討議をしてもらえればと思っています。

私たちはすでに具体的にやっています。ポスターもパンフレットも杉並区の教育委員会に渡していますが、今年の11月5日に、世界22カ国が集まって国際遊び大会を行います。これは野外伝承遊び大会です。世界の先生方が集まって来るのですが、世界の先生方は「日本はこれだけ進んでいるのか」と非常に驚きます。それはなぜかということ「遊びを教育として捉えている、教育として問題にしている」と思われているのです。実は日本の著名な先生方、教育関係者、教育委員会にいくら言っても、「ああ、遊びか、役に立たんよ、それは古い遊びだ」そういう感覚でしか捉えていません。新しい教育の

あり方とは何かと考えたときに、この遊びというものをもう1回考えていく必要があるのではないかと思っています。その遊びについての具体的なことはまた話させていただきますが、長くなりますのでこの辺で終わります。

**会長** 私も遊びというのは非常に重要だろうと思うのです。プレイショップというコンセプトがあります。プレイショップというのは遊びの場をデザインするという発想ですが、先進化すると共に、自然との距離が遠くなって、いつも自然にうまくアクセスできない。先ほどから言っているように、原っぱの話だとかはなかなか難しいだろうと思うのです。そうだとすればいま渋谷区がやっているような方法も1つのやり方であって、それはプレイショップ、つまりプロがデザインして遊びをつくるということだろうと思うのです。

私は、大人よりも子どものほうに、遊びと教育は非常に関係が深いのではないかと考えていたのです。例えば赤ちゃんなんて絶対に遊びの中で学んでいます。ですから、むしろ大人にとってよりも子どもが小さくなればなるほど、遊びと学びは融合していくのではないかと思います。小学校、中学校に入っていくにつれて、学びと遊びが乖離しているというのが大きな特徴だろうと思うのです。これは教育の方法論の問題で、教育学のほうではもう少しそういうことを考えて遊びの中で学ぶ、学びの中で遊ぶという方法を考えたらいいのではないかと思います。

コンピューターを使って学ぶというのは、私は遊びと学びが相当入っていると思うのです。なぜならば子どもたちは目を輝かせて夢中になってキーを叩いています。しかし、いちばんの問題点は、身体性がないというか、体を動かすことがないことが非常に危険ではあると思うのです。このごろはコンピューターもウェアラブルになってポケットに簡単に入りますし、そういうことでうまく使えるようになれば、おそらくそれを持って遊びの場に出て行って使うことにもだんだんくなっていくのではないかと。メディアを利用した遊びのデザインというのもあるのではないかと考えています。

**委員** 遊びが大切だということは、本当に親としても自覚しています。それは例えばゼロ歳の時から育てていく上で、いかに大勢の子どもたちと遊びながら、関わりながらいろいろなことを学ぶか。それが本当に不可欠だということで、ゼロに立ち返って、もしもいま子どもを産んだら、本当にそういうふうにして逞しい子どもを育てられるかな、というのがいまごろになって分かっているのです。

それには遅過ぎたこともないのですが、実際にいじめが頻繁に起こっているということです。今日も出がけに高校生が先生に危害を加えたという背景に、友達にいじめられて学校に行きたくない。事件を起こせば学校に行かなくて済むと思って、そういう犯行

に及んだというニュースが偶然に流れました。いちばん下の小学4年の息子と一緒にたまたまそのニュースを見ました。毎日のようにこういう話は流れます。少年の非行の裏にいじめられたという悲しい傷があるということも最近ずいぶん報道されています。

私も急いでいましたが、子どもに「またあったのね、いじめられたらお母さんに必ず話してね」と、言葉は悪いのですが「やっつけてあげるから」なんて言ったのです。そうしたらその小学校の4年の子が「いいよ、僕が自分でやっつける」と言ったのです。うちはいちばん下の子が3人のうちで遅しいのです。実際にその子はやっつけたこともあるのですが、そういうことも、おそらく生まれながらにということでしょうか、育ちながら、いじめられたらどうするかというのを体得しているのだと思い、私もちょっと安心して出掛けて来たのです。

先ほどからの何人かのご意見は、本当に現実を見据えたご意見だと思いますが、私の理想論だと言われてしまうかもしれないし、体験が少ないと思われるかもしれませんが、やはりいじめが絶対にいけないということを、大人が共通の認識として強く言い続けるということを保護者も先生もしてほしい。いじめはほとんど学校で起こることですので、いじめられたらどうするかという教育ももちろん大切なことですが、いじめは絶対にいけないということをずっと、しっかりと言い続けるということが私は大事だと思います。先生ももちろんいじめに遭遇したら、本当に心の底から信じていていただきたいし、もしも自分の子どもがいじめているにしろ、いじめられている側にしろ、知った親は同じ気持で、いじめは絶対にいけないのだと強く言いたいです。

子どもを3人育てていますから、子どもがいじめられた体験もありますし、いじめる側に回った体験もあります。実は「いじめ」という定義がこの懇談会の中でもばらばらですし、親の間でも曖昧です。本当に短期間で親が注意したらパッと終ることもあります。でも私はあえて、長期間にわたって子どもの心に本当に立ち直れないほどのダメージを与えるいじめということでは言わせていただければ、クラスでいじめが起きていすると、いじめられている子はもちろんすごく徹底的に傷つきます。それからほとんどの傍観している子どもたちも、実はとても傷つくのです。

私がそれに気がついたのは自分の子どもの体験ですが、それに対して自分たちが無力である、先生の力でもなかなか直らないということで、それを傍観している子どもたちも非常に、傷つくという言葉が当てはまるかどうかはわかりませんが、そこで正義とは何なのか、その辺に疑問を持ち始めることもあるのかもしれません。もちろんいじめている子どもには、おそらく何か背景にいろいろなことがあると思います。ですから、学

校にいる先生たちも親も、いじめというものは、いじめている側も傍観している側もいじめられている側も、とにかくすべての巻き込まれている子どもを、ひどく深く傷つけるのだという認識をいつも共有しておくことがとても大事かと思います。知らないうちに子どもが死んでしまったなんていうニュースを見ると、本当にニュースを見ながら泣いてしまうくらい悲しいのです。杉並では絶対にそういうことが起きてほしくない。

いじめられたらどうするかを教育することは大事だと思います。それもすぐに始めたほうがいいと思います。けれども、そういう教育も大事ですが、いじめられたらどうするかを頭で分かっているできない子どもというのが、そういうことに追いやられてしまうのかなとも思いますから、二重にも三重にも四重にも、いろいろなセーフティネットを張っていただいて、その中にそういう子がホッとできる場所をつくっていただくことも大事だと思います。「学級王国」というものがよくありますが、やはり学級王国というのがいじめの原因になっていることもあると思います。その子がいろいろな所で受け入れられる場もつくっていただきたいし、もちろん学校と親との協力体制もしっかり整えたい。

実は先日の保護者アンケートで、「学校はどのようにあって欲しいか」という設問に対する解答のトップが「いじめ、学級崩壊がない」ということでした。私はそのアンケートでは相当深刻なものだと捉えましたので、是非原点に立ちかえって、いじめは絶対に許さないという話を本当にして、その上でいろいろな子どもの救われる道というのを考えてほしい。杉並区らしいものとは言いません。もうそんなことを言っていられないでしょうから。済美教育研究所にもいろいろなデータが蓄積されていると思います。そういう方たちの力と、学校の先生と、そこに、もしできれば実際にいじめで苦しんでいる親、子どもももちろんですが、巻き込んでいただいて、いろいろな対策、数多くあればいいと思いますので、親も巻き込んでいただきながら考えていく方向を提案します。

**会長** いま事務局にいじめのデータというのはありますか。

**副参事** 前々回、資料3として配布したいじめの意識調査の抜粋を用意しました。必要であればお配りします。

**会長** 杉並区がどの程度深刻なのかなというのは、私もいまちょっと思ったのです。では委員どうぞ。

**委員** いじめという言葉はどう定義するかというのは、いま委員から話がありましたが、これは大変難しいのではないかと思うのです。いじめがあったかないかという調査をしたとただいま言われるのですが、その人は何をもっていじめとして書いているのか、と

ということだと思うのです。私は現場にいて、いま委員が言われるように、「いじめは絶対してはいけない」ということは、幻想だと言われても言い続けています。なくならないと思いますが、やはり継続的にやっていかなければならないと思っています。

私が父母や生徒に言っているいじめというのは、まず1つは「人間性を基本的に否定するような言動」というふうに私は捉えています。もう1つは「人の心を傷つけるような行為、言葉、行動」です。それから「人の生命安全を脅かすような行為」、これは絶対してはいけないということです。

そのほか、よく親御さんたちがやって来て、「いじめがある」と言うのですが、これは人間社会をこれから生きていく中で、正直言ってこの程度のことではあってもいいのではないかと思われるようなことまで言って来ます。男の子だったら言い合いをして、時々取っ組み合いもします。私はそれはいじめだとは思いません。取っ組み合いをして後で、お互いがコブをつくって、なぜそうなったのかということをお互いに納得して話し合っ解決していくということは、これは1つは学習なのです。

ですからあまり神経質に何から何まで全部いじめだというふうに考えないで、子どもにとっては学習をしなければならないものというはずいぶんあるので、その辺の区別をしながら大人は見ていかないと子どもが成長していかないのではないか。なんでもすぐタオルを入れてしまう、ストップをかけてしまうのです。子どもが何かやろうとすると大人がすぐにストップをかけてしまって、それ以上やらせないということが、結構多くなっている。これは学校でも家庭でもそうです。ある程度やらせてもいいのではないか。その代りその当事者同士が、それをどういうふうにして解決していくのか、やったことに対してどういうふうにして責任を負っていくのかというような、次のプロセスがないといけないけれども、その辺のところの区別をまずすべきではないかという気がするのです。決してやってはいけないことと、ある程度は人間の成長上において、お目こぼししているようなものとを区別しながら大人は見て行ってやらないと、子どもは成長しないような気がします。それが1点です。

また、昔の子どもと今の子どもでは、同じいじめをやっているではないか、という話をよく聞くのですが、私は基本的に違うところがあると思うのです。それは、何が違うかということ、子どもが育っている環境が違うのです。昔の環境と今の環境とがまるきり違うので、子どもたちが生きていく、毎日毎日を生活していく形態が違ってきているのではないかと思うのです。例えばこの文明社会で物がこれだけ豊かになった中で、子ども社会の中でもやはりお金ということが相当重要な位置を占めている。親もお金という

ことについてはずいぶんいろいろな面で、子どもを育てる上でお金との関わりがあります。どちらかという、親の愛情よりもお金のほうが大切だというような感覚で捉えられる問題も出てきている。私はそういう面が1つあると思います。

それから、多様化する社会の中で、不安とかストレスが増大している。これは、昔に比べれば人間が生きていく上の不安、ストレスは、相当増大しているのではないかと思います。もうそういう社会になっているわけです。そういう中で子どもたちに昔と違いたいじめが出てきているということは、愛情不足からくる心の渇きというようなものがあるのではないかと思います。少子化という現象も言い忘れましたが、1つには少子化という現象からもたらすものもあるということ、先ほどに付け加えさせていただきます。

そういう社会現象の中から、やはり子どもたちが心の渇き、愛情不足、これは親からの問題もそうですし、我々教員からの問題もそうですし、いろいろな所から自分が本当の意味の愛情を得られているのかどうなのかということについて、もう少し考察する必要があるのではないかと思います。

あとは、集団の中で生きていくという訓練が足りていないのではないかと。これはやはり少子化からくるものだと思いますし、またいろいろな社会現象からくるものであると思いますが、ファミコンがあれば1人で遊べますよね。先ほど委員が言われましたが、みんなで一緒になって遊ぶという体験がだんだん薄れてきている。そういう中で、「集団の中で生活をしていく、本当に自分が孤立しないで生活をしていく」というところから、だんだん孤立化している子どもたちが増えているのではないかと思います。

そういう中で、特に自分自身の存在価値というものが見い出せているのかどうなのかという問題が次に出てきます。いわゆる自己に対して否定的な子どもが、結構増えているのではないかと。いま言ったような現象が、いろいろないじめの原因となっているのではないかと。いじめをもたらしている原因の1つになっているのではないかと、現場にいて感じるのです。だから、いじめをなくそうということはどうしたらいいかという、それはなくなれないかもしれないけれども、我々現場では、それをやっていかなければいけないのです。やはりその都度その都度、エネルギーに実践をしていかなければいけないと思うのです。その中で何をやらなければいけないかという、子どもを認めてあげて、その子の存在価値を認めてあげることによって、親も教員も愛情を注いで、心の渇きを癒してあげることが大事であろうと思います。また、集団の中で自分の周りには友達と共に一緒に生活をする中から、その集団の中のダイナミック

スによって解決していかなくてはいけない問題ということもあるだろうと思います。

そういうことを通じながら一步一步子どもたちを訓練しながらやっていく。いじめというのは本質的なもので、なくなるものだから、どうしたってしようがないのだというふうには学校も家庭もいかないと思うのです。いろいろなことを試みながら子どもたちの感性に訴え、そして現実的な場の中でなくなるように努力をしていく。その中でも特に大人の背を見て育つという面もありまして、例の公園デビュー何とかというような事件もありましたが、大人の中でも子ども以上のいじめの形態があるということは、我々もよく知っているわけです。家庭の中においては、そういうものが子どもに反映しないような努力は、当然あって然るべきだと思います。

いじめをどういうふうに防御するか、それにどういうふうに対処するかということも教えていかなければいけないということは、先ほど委員の方々からお話がありました。それは学校教育の中において、今後こういうことについても真剣に考えていかなければいけない大切な問題提起だと感じながらも、それ以前にやることは諦めずにやっていくことが必要ではないかとは思っています。以上です。

**会長** 懇談会としてはこういうふうにとらえたいのではないかと、その方法を提示しないといけないものですから、どういうふうにとらえたいかという立場でディスカッションをしていただきたいと思います。

**委員** いじめで、かつて自ら命を断ったというケースがたくさんあったときに、私たちは現場の教師として、やはりいじめは絶対してはいけないのだと口を酸っぱくして言ってきたつもりです。いまいろいろな委員からお話を聞いている中で、具体策かどうかは分かりませんが、やはり生きていく上でストレスや不平、不満や、愛情が足りないとか、私も常にそう思っているわけです。そういったことを思っている子どもが、親や仲間や教師に誰も話せないのです。誰か1人にでも話していたらおそらく自ら命を断つことはなかったと思うのです。やはり私たちは子どもから話を聞く、聞けるような関係、もっと突っ込んだ言い方をすると、信頼されている関係というのですか。それは親と子であり、教師と生徒であり、また違う形もあると思うのです。

子どもたちが「先生助けてよ」という一言が言えるような教育をするために何をしなければいけないかということ、日々子どもたちの、前回も言ったつもりなのですが、お互いに学んだり認めたり、そういったことを続けていくしかないのではないかと。一朝一夕で関係はできません。ただ、その中には保護者の協力も必要だろうし、我々の勉強ももちろん必要でしょう。そういった中で子どもたちが話せる雰囲気、話すことができる人、

1人でもいいからつくっていきたい。そういうものを私たちは目指しているのです。やっていないわけではないのですが、努力が足りないと言えば大変申し訳ないと思いますが、少しずつ努力はしています。

いま、多くの委員が言われたように、してはいけない、してはいけないではなくて、どうやって克服したかとか、そういう場に遭ったらどういうことを考えたり行動しなければいけないかという話も、講演会や道徳の授業だとか、いろいろな部分で子どもたちと真剣に考えていく必要があるのかなと、いま反省をしたり将来のことを考えて、学校の現場の長として必要なのかなと思いつつ話をさせていただきました。

**委員** 既にいろいろな委員から発言されたことでもありますし、これまでも何度も繰り返されていることですが、具体的に言いますと、いま委員の言われたことも、子どもたちから信頼される、ずっと子どもたちの触れ合いを続けていく。そういうことのためには、何度か繰り返された先生対子どもの数の関係があると思います。例えば、30人学級の実現と、もう1つほかの委員も言われたことですが、大人の複数の目で子どもを見ることができるよう人の配置といいますか、例えば担任の先生とそのほかの例えば教育の補助員の先生であるとか、場合によっては教育実習生などでも大変に子どもの心をつかむというケースがあります。

先ほどの委員のお話の中に、自分の過去を知っている人との関係では話せないことというのが出ていました。何か新しい人間関係ができることによって、訴えたいことが訴えられるというケースも出てくる。そういう意味で、まず教師対子どもの数の関係だけではなくて、同じ生徒たちに関わり合う複数の大人がいるということが大事だと思います。それからよく言われることですが、保健室の先生なら何でも話せるというケースが多いようですが、例えば補助員の方、保健室の先生、教科の先生といったような方が、学級横断的に子どもとの関わりを持つ。つまり、ある固定された立場からだけ子どもと接触するのではないという場がつくることが1つ必要ではないかと思います。これは既に言われたことの具体的な付言です。

もう1つは、「いじめの認識」という話がありました。会長からも「情報」という話がありました。個人個人によって何がいじめであるか、どういうことを言ったらこれは相手を傷つけることになるか。非常にはっきりした場合は誰でも分かると思いますが、ある子どもにとっては非常にあることが痛みを感じるような事柄である。けれども、ほかのより多数の子どもにとってはなんでもないことだということがあります。

例えば私自身の話をしますと、自分が子どものときに風邪をひいて寝ている。その寝

ているということが大変恥ずかしいことだったわけです。そこへ弟や妹が近所の子どもなんかを連れて私の寝ている部屋の周りなどに来ると、それはもう大変自分が傷つけられることだったわけですが、それは私自身の特異性かもしれませんが、ほかの方はそれほど感じない。

そういったように個人個人で何がいじめか、何が傷つくことであるかというのがそれぞれ違う場合があると思います。そういう認識、あるいは情報について考える機会、お互いに話し合う機会、そういうものを、教育をする立場、大人の立場、これは学校の先生あるいは親御さん、あるいは年上の兄弟でもいいですし、年上の友達とかいう方でもいいのですが、子どもによく考えさせるような場をつくってあげることが必要ではないかと思っています。

いま非常に話題性のあることとしては「セクハラ」という問題があります。このセクハラは、何がセクハラになるかというのが、まだ日本の社会でははっきり定着していないようです。こんなことを言ったらセクハラになるかとか、こんなことはなんでもないだろうと思うことが、相手の側から見ると非常に不快なことであるとかいうようなことで、問題になっています。それほどではないにしても、やはりいじめということについての認識はかなり個人差があったり、違った見方があるのではないかと思いますので、そういう点についての認識を深める必要がある。これは是非考えていただきたいと思います。

**委員** 皆さんいま「学校と子ども」という感じなのですが、先ほどの、子どもたちのいじめの問題とかは、幼児のところから始まっていると思ったのです。人間関係のつくり方というのは、砂場からもう、親がべったりくっ付いているところから始まっているのです。ずっと見ていて思いましたのは、例えば一つの玩具を同時に手にしたときに、そこからすぐに様子を見ないで「何々ちゃん駄目よ」と言ってしまう。そういうふうにしていまの公園の中での人間関係がつかれなくなってしまうている。せっかく杉並区には児童館とかいろいろな施設があるのに有効に利用されていないのです。杉並というのは子どもが圧倒的に少ないのです。

私は小金井で幼児期の子どもを育てたのですが、児童館の数が少ない分、遠くから皆さん通って来るのです。たった週1回なのですが、そこで60人ぐらいの幼児を2歳児、3歳児とグループごとに分けて、その1グループの親だけが子どもを見るのです。だから当然親の目が届かないので、どこかでちょっと泣いちゃったり、喧嘩になったりする。目が届かない分、そこで子どもたちが学び合っていたこともあったのではないかな。当番

でない親は、他の部屋でいろいろなディスカッションをしたり、その時々テーマを設けて話をしたりとか、「子どもがよく頑張ってきたね」みたいな褒美シールを作る班とかというところから、親同士のコミュニケーションをお互いに取りましょうということだったのです。親がずっと子どもといなくていい時間をつくってあげることもすごく大事なのではないかと思うのです。

いま、児童館では、子どもの数が少ない分お母さんたちの目が行き届き過ぎているのではないか。どうしても2歳児、3歳児のそばにお母さんが座っている。そうして親同士がコミュニケーションを取っているようでも、目の中で子どもを追い掛けているわけです。自分の子どもなのですが、子どもは社会の財産だみたいなところで、少し「親」から解放される部分、ベッタリくっ付いている幼児から解放してあげられるような時間を、もっと多くの集団で経験できるような時と場所が設けられないものなのかなと思います。そういうところから子どもたちは遊び方を学ぶの思うのです。

いま小学生などは野外の遊びを知らないです。遊ぶ場所もないのです。特に私が住んでいるのは駅の近くなので、公園もない場所なのですが、たまたまバックネットのある公園があるのでそこでボールを蹴ると、「寝たきりの方がおられるから、ここではボールは蹴らないでくれ」と、すぐに苦情がきてしまうわけです。遊び場所がない。だから、いま杉並の場所のない中でここに公園をつくってくれとか、自由に遊ばせるスペースをつくってくれというのも一朝一夕すぐには出来るものではないと思いますが、「この路地は第1週目の何曜日は遊べます」みたいな、できるところから始めていく提案もあるのではないかと思います。そういう中で地域の方たちがお年寄りとか、いろいろな年齢の方たちに関わってもらえたらいいと思うのです。

**委員** 提案したいと思います。まずはいじめですが、いじめをなくすという言葉は、私は良くない言葉だと思うのです。先ほど言われた「いじめを許さない」、これは大変素晴らしいことだと思うのです。いじめは許さないのですが、なくすことはできないと思う。ですから皆さんが言われているように「いじめは許さない」という言葉が使われたほうがいいのではないかと思います。

社会現象が変わったというのですが、私は民族学の立場から言うと、社会現象がいかに変わっても、変えてはいけない部分があるのです。これは学校教育学の中にはあまりないのですが、教育人類学の中にはあるのです。社会には4つの捉え方があります。「どんな時代でも変えてはいけないこと」、「変わらないであろうこと」、「変えなければならぬこと」、「変わるであろうこと」です。青少年教育、教育として、基礎づくり

としてしなければならないことは、変えてはいけないこと、変わらないであろうことを伝えることです。変えなければいけないこと、変わるであろうことを伝える必要はないのです。社会現象によってクルクル変わっていくのはこの変えなければならない部分、変わるであろうこと。これは子どもたちがいつの時代にも自然に対応していくものだと思います。

人類は古代から、古い歴史・文化を持っています。それを伝承していくのが変えてはいけないこと、変わらないであろうことです。では変えてはいけないということはということかということ、これは人間、社会人としての信頼関係です。変わらないであろうというのはということかということ、人間がつくっている文化としての道徳なわけです。こうしたことはどこで身に付くかということ、実は集団の中で身に付くものです。言葉や活字、視聴覚では決してとはいわないですが、まあ10分の1ぐらいしか身に付かない。集団的な活動、集団訓練を通じてそれが身に付くものなのです。

その集団訓練の最初の授業は何かということ、実は遊びなのです。古代から、大人は子どもの遊びを許してきたというのは、そうした集団としての遊びを通じて社会人になるために、大人は暗黙の了解の下に子どもが遊ぶことを許してきたわけなのです。それがいま許されていないというよりも、評価されていないのが今日の日本なのです。

私は日本の民族研究よりも、世界のいろいろな非文明地に行って民族の研究をしているのです。それはなぜかということ、日本は高度な文明社会になって、機構が複雑過ぎて分からないのです。しかし、素朴な非文明社会に入ると非常に物事がはっきり見えてくるのです。非文明社会に行きますと、これは文明社会も非文明社会も同じですが、親の世代は子どもを養うというか、家族を養うために精一杯働いていますから時間がありません。ところが、祖父母の世代というのは、非文明社会では大変時間があります。村の中で遊ぶ大体7、8歳ぐらいまでは祖父母の世代が子どもと一緒にいます。その祖父母が子どもの遊びを見て、いろいろ伝えて意見を述べ、悪いところは教えていきます。これが人づくり教育の始まりです。子どもたちは集団で行っていますが、それを見守っているのが祖父母なのです。

祖父母というのはもう残っている人生が短いですから、あの世に行く前に全て残していこうということがあります。子どもを教えると同時に子どもの新しいエネルギーを学びとっているわけなのです。教えることは学ぶことだということ、教えることの喜びを高齢者は感じているわけです。ところが子どもたちは、自分たちの知らないことを高齢者から与えられるものですから、非常に偉い人だという意識があります。そこから敬

老の心が生まれてくるのです。単に年をとったから偉いのではなくて、自分たちにいろいろな生きる知恵、考える力、そういうものを与えてくれる人、それを敬う気持が敬老の心です。日本のように単に80歳になったから敬えとか、俺は高齢者だから、熟年者だからと言っているのは、社会的には何の意味もありません。個人的なことだと思います。

今日のテーマであること全てに通して言えるのですが、高齢者が1人で楽しめば、これは意味がないです。高齢者は、次の世代を担うであろう青少年と共に行動をすることによって、高齢者が永年培ってきた知恵・知識・技能、そういうものを残していく。その力が子どもたちにとって大変有難いことなのです。その力は子どものときには分からないのです。その子どもたちが20歳になり、30歳になってきて始めて分かってくる。50歳や60歳の時に、教えてくれたその人たちが70歳とか80歳とか、いま日本は長生きですからそういう状態になっている高齢者を、物事を教えられて成長した人たちが敬う、これが敬老の心なのです。単に年をとった高齢者を敬えと言うのはあまり社会的ではないことだと思います。

子どもを育てる場合に、老人ホーム、保育園、学校などの隣接活用、これはもう当たりまえのことなのです。社会を営むためにはこうでなければいけないのです。本来なら日本の社会もこうだったのですが、戦後は高齢者が学校に行くことを、また高齢者と子どもたちが接することを禁じてきたのです。特に我々が幼小時代には、高齢者は悪いビールスをたくさん持っているから子どもを近付けるなど、これはアメリカのとった政策です。それはなぜかというと、高齢者の持っている文化、風習、知恵、そういうものが日本の若い世代に伝わってはいけないという狙いがあったわけです。その狙いがずっと成功して、見事に高齢者の知恵が伝わらなくなって、いま生涯学習と言って、60にも70にも80歳にもなって、一生懸命に学んで喜んでいきます。高齢者がゲートボール、旅行をして喜んでいきます。

本来の青少年教育は高齢者が一緒になってすべきものなのです。子どもたちがそれによって知恵、知識、技能を身に付けることによって高齢者を敬う、それが敬老の心になっていくわけです。言葉や活字で敬老の心は教えられません。これは生きる知恵として残していくべきものだと思います。そういうことで遊び、これは単に、子どもだけではなくて大人も親も含まれた遊びを通じて集団的訓練がなされる。教育の原点、学習の原点は遊びです。古代も今も変わっていません。それは地球上の人類全てが平等で同じです。

そこで私は文部省を通じて、小学校の低中学年に野外伝承遊びの導入を4、5年前から提言していました。前回も言いましたが、小学校低中学年に4科目入っています。それはどういう遊びがいいかといいますと、1、2年生には規則や競技性の弱い遊び。1年生は例えば草、泥、水、雪、木の実遊びなどの遊び。2年生は縄飛び、鬼ごっこ、かくれんぼ、肝試し、押しくらまんじゅう。3年生から4年生には規則や競技性の強い遊びとして、3年生は風車、水鉄砲、紙飛行機、お手玉、石けり、石当て、馬乗り、相撲。4年生は竹とんぼ、竹馬、こま、凧、遠足、そして騎馬戦、竹笛、木笛、こういうものを学校教育の中でもやっけていこう。そして地域の公園でもそれをやっけていこうということで、いま進めていますから、杉並区でも是非、教育委員会はそのことを感じていただいて、学校教育、社会教育、家庭教育と言わず、そして子どもだけではなくて、親も、高齢者も一緒になってそういう遊びをしていただければ、子どもの地域化、そしてバリアフリー、そして家庭教育、社会教育、学校教育の相互作用、そういうもの全てが含まれていくと思います。

日本は知識・技能は教育をしています、社会人になるための教育が欠けているのではないのでしょうか。このことをまず考えていただいて、日本の青少年問題、即高齢者問題です。子どもは高齢者になります。

私はエスキモーに関する本を読んだことがあります、エスキモーは極寒の地に住み食べ物が少ないですから、老人は自ら命を絶ってしまいます。人間についてあまり知らない若い夫婦が子どもを産みます。子どもには歯がありません。目もよく見えません。ギャーギャー泣きます。するとその若い夫婦は子どもに関して知識が無いので、この子どもは障害があると言って殺してしまいます。

昨日でしたか、一昨日でしたか、新聞にも載っていましたが、親が子どもを投げ殺したと。会長も言われていましたがアメリカでは多い。もう既に日本はそういうことになっています。大人が子どもをしっかり教育していないと、いまの子どもが30歳、40歳になって自分の親が高齢者になった時、高齢者と共に生活をしたことがないから、高齢者というものを知らないから扱い方が分かりません。いま30、40代の人たちが60、70代になったときに、高齢者である自分自身をどう対処していいか分からなくなってしまいます。日本はあと20年するとそういう時代が来ます。そういう点で、青少年問題即高齢者問題ですので、子どもも大人も高齢者も一緒になって、社会を営む、社会をつくるという対人教育が必要なのではないのでしょうか。そこからいじめも少なくなってくるのだと思います。

**会長** どなたか、どうぞ。

**委員** 先ほど遊びということを行いましたので、このことについてと学級崩壊といじめのことについて、若干提案させていただきたいと思います。

遊びについてはいろいろな提案があるわけです。南の方には杉並区で興業銀行の跡地の大変広い素晴らしい土地があるということ。西の方では日産自動車の跡地の大公園が出来るという構想があるようです。地域住民の方のいろいろな意見とか、うまく共通理解を図るのは難しいと思うのですが、基本的には地域住民の方の主導によっての公園づくりができないかと思います。行政の知恵もあるでしょうが、地域の皆さんが自主的に、例えば若干時間がかかろうとも、子どもたちの理想とする公園といえますか、中学生も含めてどう公園づくりをしていったらいいのか検討したら良いのではないかと。いま遊び場づくりのいい時期ではないかと思います。近隣の地域に集約されてしまって関係がないという所もあるかと思いますが、新たに公園をつくる所があるとすれば、そういうような新しい時代の公園づくりができないか。どこに行っても同じという公園ではなくて、そういうものを是非お願いしたいのが1つです。

学級崩壊に関しては、起きているのはたぶん小学校だろうと思います。中学校では教科担任制ですので、いろいろな先生が出入りしていて、いろいろな目で見られているわけです。いじめも小学校のほうに多いのかなと想像するわけです。私の提案は、小さい子は担任の先生がしっかり子どもを暖かく受け止めることが大切ですから、中、高学年を通して教科担任制を今後どんどん取り入れていく必要があるだろうと思います。教員の配置で難しいところもありますが、そういう多くの担任、多くの目を見ていく。TTも入ってきていますし、専科教員も副担任として入っていくとか、そういう多くの目を見ていくと、いじめも、学級崩壊も克服できるのではないのでしょうか。なかなか難しい面もあり、指導力不足ということもありますので難しいですが、やはり多くの教員、組織で見ていくということが必要だと思います。

第2点目は、これからの選択制なども考えてみますと、学校公開、これはどうしてもしなくてはいけない。うちの学校はこういうふうな学校ですよという発信をしなくてはいけない。保護者の皆さんからはどういう学校ですかという問い合わせも当然出てくるわけです。ですから、いつでもどうぞ学校をご覧ください、いじめもあるかもしれませんが、許されることではないけれども、どうぞご覧くださいという、学校を開くという観点からも必要だろうと思います。

ただ、どんな方でもいいということは、安全性の問題もありますのでその辺のところ

は配慮していかなければいけないわけですが、傍聴者の意見もこの懇談会に寄せられています。意見の中で「学校の情報が伝わってこないではないか、もっと伝えてくれ」ということもありましたし、PTAの皆さん方は、もっと私たちの意見も学校に反映させてほしい、反映したいのだという時代だと思っています。学校をできるだけ公開して、いつでもどうぞという方向に進んだらいいと、この懇談会の中でそういう方向を出していただいても有難いと現場では思っています。

**委員** 教育の問題というのはとても難しい問題で、ずっと私もどういう言い方がいいのかなと思っていました。ここでいま課題である全体を通して言いますと、杉並のこの教育委員会だけではないですが、日本中でこういう審議会をつくったり、いろいろなことをやっていると思うのです。そこでおおよそどこでも同じように言われるのは、やはりいじめなどのことだと思うのです。

そういう議論の中で一体大人の側は、親の側は、あるいは社会の側は教室をどういうものだと考えるのが理想なのかということがあると思うのです。本当に30人なら30人のクラスで、いじめもなければ、先生の言うことから何から全部聞いて、授業を静かに聞いていて、そして遊びを覚えて、2年生になったら竹とんぼをちゃんとやって、4年生になったら何かをちゃんとやって。私はそういう子どもは気持が悪いですね。子どもがそんなふうでしたらむしろ未来がないのであって、少々の不良が出るとか、そういう野性がなければ実際の話、生きものなんて私は言えないと思うのです。

ところが、いまの日本の教育論議というものの中には、過剰なぐらいに「いじめがあって、それがどうなって」とか、学級崩壊だとかいうことの中で、もちろんそういうことがあるから出ていると思うのですが、つまり「いい子」、ちゃんといい子を育てなければいけない。そういう気持があり過ぎると思っています。逆にいい子にしなければいけないと、ちゃんとした子でなければいけないということで、そういう制度の中に押し込めよう、押し込めようというふうなプレッシャーがあるからこそ、逆にそういう問題が起こっているのではないか。日本の大人たちはそういうことを期待すること自体、大人が我が身を振り返って見る必要があると思っています。

いま教育基本法を改正する中で、日本の子どもたちが義務の精神とか、奉仕の精神がないから、一時的にでも義務を入れたいといっています。私はこれは悪い冗談としか思えません。50年間そんなことをやってきたことのない日本の大人たちが、どの面をさげて子どもに義務だの奉仕なんていうことを教えるのか、これはもう悪い冗談としか言いようがないと思うのです。

子どもというものは大人社会が鏡ですから、「被写体が変わらないでどうして子どもが直るのだ」と思うのです。つまり子どもの教育論という前に、大人の教育論をやるべきであって、今回の懇談会のことは抜きにしても、どこでも大人たちが口泡を飛ばして、やれ登校拒否があるからなんとかと言いますが、大人の教育論というのではないわけです。子どもが学校に行かない、いじめをやっているなどと言いますが、自分らは何もしないというか、大人の側が議論をするのは楽です。

子どもというのは明らかに社会の鏡なわけですから、社会をそのまま写し出して、そういうことが行われているわけです。あえて杉並の教育を考えるということであれば、こういう問題、学校教育だとかということだけに絞り込んでやるよりも、「杉並大人教育基本法」でもつくったほうが、あるいは「大人義務・奉仕法」か何かをつくって、大人がここに来て我々の意見を聞くよりも、夜回りでもしたほうがよほど子どもたちに対して、私は影響力があるのではないかと思います。

何を言いたいかという、こういう問題にあまりに日本の大人たちが真面目な議論をし過ぎるのです。とにかくいじめだったら、うちの学校に何人いじめがあるのだということばかり。私は先ほど言ったように、あるのを許してはいけないのですが、それをどういうふうに解決するのだということをお教えるほうが先なのです。そういうことによってももの考え方ができるのです。つまりいじめをするな、なぜしてはいけないのだと言われたら何と答えますか。まずそういうものが発生する前に、いじめが起こったらどういうふうにして解決していくのだということをお教えるほうが私は先だと思うのです。そのことを議論し合うことが知恵として出てくるわけですから、まずそういうことを教えて、つまり危機管理、危機を予知する、危機を予防することを教えるのが先なのです。これはしてはいけない、いじめをしてはいけないなんていうよりも、議論の場でそういうことがたくさん出るようにすべきだと思います。

私のささやかな経験で言えば、本当にいじめられる子というのは誰にも相談できなくて死んじゃったりする、ということは委員が言われましたが、そうだと思うのです。つまり本当のことは誰にも言えないのです。人間というのは本当のことを言えないのです。なぜかといったら本当のことがいちばん嫌いですから、本当のことだけは言うことができないうわけです。心に思っていないことでしたらいくらでも話せますから、例えばいくらでもこういう議論というのはできるわけです。本当のことは言えないのです。では、本当のことはなんて言えるようにするのかといったら、先にこういうことがあるのだということをお教えていかないとできませんね。

私は自分の子どもに言ったことがあります。もしもいじめがあったらまず連絡しなさいと。何をするかといったら単純なのです。私が娘に言ったことは「私が出掛けて行って報復する」と。自分の子どもがいじめに遭ったら親ができることはたった1つです。やっているやつを特定して、学校の前で待ち伏せする。皆さんお笑いになるけれども、私は生きものというのはそういうものだと思っています。これだけが暴力が許されるのです。ほかの暴力は許されませんが、自分の子どもが襲われかかったときに、親が振るう暴力だけが許されると思っています。私は生きものとして考えているわけです。生きものというのはそういうものだと思っていますから、私は娘に「私が報復する」と言いました。残念ながらそういう機会はなかったから、私はいまのところ傷害事件を起こしていませんが、その時だけは親というものは傷害事件を起こしてもいいと思っています。

**委員** 委員の知識者としての言葉はよく分かりますが、知恵者の予防対処をしましょう。

私は1つ提言を忘れていたのですが、先ほど委員が言われた浜田山の銀行の跡地の件ですが、実は杉並区のほうにも、あそこを是非「農業公園」にしてほしいということを手前ですでに提案しています。今月の末に区長にも会いますから農業公園の話をして。その内容については後ほど機会のあるときに詳しく申します。是非この懇談会の主張として農業公園の件を入れておいていただければと思いますので、よろしく願います。

**委員** 遊びと人という絡みからずいぶん話があったと思うのですが、私も個人的には遊ぶということは大人も子どもも目を輝かせていますから、大事なことかなと思います。いま特に小学校で言えるのかもしれないし、中学校でも言えるかと思うのですが、遊びを人工的につくることも、つくり方はいろいろあるかと思いますが、原点に帰って先生と子どもが遊んでいる姿がいま見られない。先生と子どもたちが話す、会話ですか、そう言ったことも、何かがあったときには会話をするけれども、自然的な顔が、笑顔というか、柔和というか、引きつっていない顔で会話をしている姿が少ないのではないかな。

小学校で若い先生が子どもと一緒に遊んでいるというのは、昔はたくさんありましたがいまは大変少ない。学校に若い先生も入れてほしい。「人材バンク」という言葉がいけないという意見もありましたが、そういう制度も杉並独自の教員の配置を考えていただければいいのかなと思います。子どもたちと共に働いたり、遊んだり、共に何かをするという教師の制度を確立していただければ、もっともっと子どもたちが教師と会話をする中で信頼もできるだろうし、ものも言える機会が多くなるのではないかなと思います。以上です。

**会長** そろそろ終わりにしたいと思うのですが、傍聴者の方では是非という方、1人だけ簡

単にお願いします。

**傍聴** 今日はいじめの話が多かったのですが、そういう人と人の関係とか集団とか地域とかの関係を「社会的環境」という言葉で代表したとして、また、学校農園だとか、体育館ではなくて、外へ出て遊んだほうがいいのかというのを、「自然的環境」という言葉で代表するとすれば、自然的環境と社会的環境を複合的にどなたかが語っていただけないかなと思うのです。

なんでそういう質問をするかということ、浜田山の興銀のグラウンドをどのような公園にするかということで、私も区民として関心を持って首をつっ込んでいるのですが、主なところでは自然の公園にしたいということと、プレイパークをそこでやりたいという人がいるのです。自然の公園という人は、自然体験をさせたいという意見があって、子どものことも大いに意識していきまして、そういうふうに言われます。プレイパークのほうはもちろん子どもが対象なのですが、私はそこに自然的環境ということも意識して、「エコプレイパーク」という言葉を言っているのです。自然の公園がいいと言っている方は自然的環境のことを主にイメージして、プレイパークのほうの方は社会的環境のほうを主にイメージしてその複合的なものを同時にというふうに両方の方が考えないのです。せっかく新しい公園ができるから両方を同時に実現したらいいと思っているので、その辺で複合的な意見をどなたか言っていただけると有難いと思うのです。

**会長** 時間もきましたのでそれは宿題にして次回にでも考えることにいたしまして、そろそろまとめに入りたいと思います。

今日は本当にいろいろなディスカッションを委員の先生方からいただきまして、ありがとうございました。私なりにまとめさせていただきますと、いじめは許さないということだけは皆さんの共通な認識だと思うのです。いじめを予防することも含めて遊びの活性化とか、週に路地の一角を遊びの路地として開放するとか、児童館をもっと活用するというご意見もあったと思います。子どもと話し合う人間関係、それは先生と子どもの場合もそうですし、高齢者と子どもというものも出ました。大人がそもそもちゃんとしていないからいけないのであって、そういった大人の教育も考えるというご意見があったと思うのです。これは社会教育に入るのかと思いご意見を伺っていたのですが、そういうことも考えなければいけないのではないかと。杉並方式として、先生の配置を、小学校のときからいろいろなやり方を考えたらどうだろうかというご意見も出たと思うのです。

事務局から配布されたような8回以降のテーマとして「家庭教育のあり方、社会教育

のあり方、地域教育力のあり方」などもディスカッションしていきたいと思います。冒頭で願うのを忘れたのですが、配った資料の説明をしていただけますか。

**副参事** 基本的には参考資料ということで配布したのですが、前回傍聴された方の貴重なご意見をまとめたものが置いてあります。それから、教育報というのは、教育委員会がつくっている広報誌なのですが、トップの1面に、子ども集会の記事などが載っています。会長のコメント等もいただきましたが、紙面の関係で各委員の言葉が載せられなかったのですが、写真なども載せています。これも参考にさせていただきたいと思います。

黄色い冊子ですが、これは区の企画部で行ったものですが、「魅力ある学校」というテーマで、区政モニターの方約100名弱の方にいろいろな意向を聞いたものです。これについても今後の議論の活用的一端としていただきたいと思います。

**会長** どうもありがとうございました。次回以降の懇談テーマは、配布した資料の中にある「家庭教育のあり方を考える」です。今日のディスカッションを違ったスタンスでディスカッションし直すということになると思いますので、よろしく願いいたします。

今後の日程調整等、事務局からお願いいたします。

**副参事** 次回、第8回は10月26日ということで前回に決めていただきましたが、第9回は11月21日(火)がいまのところお1人だけ参加できないということですが、いちばん多い参加になりますので11月21日(火)に第9回を予定させていただきたいと思います。

**会長** 今日は興銀の土地の話まで、大変具体的な話まで出てまいりましたので、それは次回を含めてのディスカッションで必ずすることにいたしまして、今日はこれで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。